

2. 機構内でのネットワークを活かした対応

患者搬送

(1) いわき病院の患者搬送

いわき病院では、地震直後の津波の被害により外来施設が床上浸水し、床や冷暖房機器などの破損、医療ガス供給装置の冠水があった。更に、停電時に使用していた自家発電機が故障したために被災4日目の3月14日に全入院患者の搬送を決定した。

15日より順次、入院患者130名（うち重症心身障がい者80名）を、国立病院機構の8病院（米沢病院、水戸医療センター、霞ヶ浦医療センター、茨城東病院、西群馬病院、東埼玉病院、千葉東病院、下志津病院）及び他の民間病院へ搬送した。なお、10名は退院または外泊とした。



【入院患者の転院先病院】

患者受入病院	患者	人数
水戸医療センター	神経難病等患者	39名
米沢病院	重症心身障がい者	11名
霞ヶ浦医療センター	重症心身障がい者 神経難病患者	42名 5名
茨城東病院	重症心身障がい者	4名
下志津病院	重症心身障がい者	5名
千葉東病院	重症心身障がい者	4名
西群馬病院	重症心身障がい者	5名
東埼玉病院	重症心身障がい者	5名
さいがた病院	神経難病患者	2名
北里大学病院	神経難病患者	5名
かしま病院	人工呼吸器装着患者	2名
市立総合磐城共立病院	人工呼吸器装着患者	1名
合計		130名

【重心患者の搬送手段】

搬送先	人数	搬送手段
霞ヶ浦医療センター	42名	自衛隊大型ヘリ2機
米沢病院	11名	山形病院のバス
下志津病院	5名	ブロック借り上げのリフト付きバス
千葉東病院	4名	ブロック借り上げのリフト付きバス
西群馬病院	5名	西群馬病院のマイクロバス
東埼玉病院	5名	西群馬病院のマイクロバス





福島県いわき市：平成 23 年 7 月 11 日撮影（国土地理院）

①患者搬送経緯

3月11日（被災当日）

震災直後の津波被害により外来施設が床上浸水

3月14日（被災4日目）

停電対応として使用していた自家発電機が故障し、修理するものの油漏れを起こしかろうじて運転している状況となった。さらに断水に加え、重油と食料も2・3日分で、補給の目途がたたず、病院機能の維持が困難と判断し、全患者の移送を決定し、患者の搬送先と搬送手段の確保を病院にて検討開始した。

3月15日（被災5日目）

一般患者60名のうち、39名はいわき市消防本部のバスにより、水戸医療センターに搬送するとともに、いわき病院の職員7名（内科医長1名、理学療法士2名、副総看護師長1名、看護師1名、業務技術員1名）は、水戸医療センターにて継続的な勤務とした。

残る一般患者21名のうち、人工呼吸器を装着したALS患者13名はいわき市内の病院へ救急車で搬送すると共に、8名は退院または外泊とした。

一方、重症心身障がい者80名のうち、人工呼吸器を装着した2名はいわき市内の病院へ救急搬送するとともに、2名は家族の意向により在宅へ、4名は茨城東病院で受け入れた。

3月16日（被災6日目）

重症心身障がい患者の残り72名は、本部と関東信越ブロック事務所にて搬送先を検討し、霞ヶ浦医療センターへ42名、米沢病院へ11名、下志津病院へ5名、千葉東病院へ4名、西群馬病院へ5名、東埼玉病院へ5名搬送した。

なお、霞ヶ浦医療センターへの職員32名の派遣を始めとして、患者搬送先の各病院に職員も派遣し、交替で勤務にあたった。

②搬送患者の帰院について

いわき病院では、病棟・外来の建物の主要な損傷の修復が完了し、電気水道等のライフラインも復旧したため、いわき市からの病院再開要請等も踏まえ、搬送患者の帰院を決定した。搬送にあたっては、5月17日より患者・家族の意向確認を文書で行った後、患者の安全確保の上で軽傷患者はマイクロバス等にて人工呼吸器装着等の重症患者は救急車による搬送を順次5月30日より実施した。

なお、帰院後の病棟の使用については、退院患者等もいることで患者数が減少していたことから震災前4病棟使用に対して、3病棟による運営となった。

(2) 宮城病院、茨城東病院、宇都宮病院の患者搬送

被災した宮城病院から人工呼吸器装着のALS患者4名を新潟病院に搬送した。4名は3月19日の午前、午後の2回に分け2名ずつ陸上自衛隊高田駐屯地にヘリコプターで運ばれた。高田駐屯地からは、新潟病院の医師、看護師、臨床工学技士と救急隊が宮城病院のスタッフから引き継ぎを受け新潟病院に搬送した。なお、3名の患者は6月6日、21日、28日に宮城病院へ1名ずつ再搬送され、残る1名は7月5日に民間病院へ転院した。

また、茨城東病院から重症心身障がい患者4名を霞ヶ浦医療センターに、宇都宮病院から重症心身障がい患者3名を栃木病院に搬送した。



①②③いわき病院から患者搬送
④⑤⑥霞ヶ浦医療センターでの患者受入れ
⑦⑧水戸医療センターからいわき病院へ再搬送
⑨⑩宮城病院から患者搬送



医師・看護師等の派遣

(1) 仙台医療センター、宮城病院への派遣

仙台医療センターでは、仙台市内の公共交通機関が全てストップするとともに、ガソリン等の燃料不足から、多くの職員が通勤できない状況であった。そのような中、病院に泊まり込みで、少ない水と食料を糧に地域の中核病院として被災した患者を受け入れるとともに、避難所となった近隣中学校等での救護活動に従事した。

宮城病院では、職員の2割以上が自宅等の被災により生活基盤を失うとともに、通信の途絶え孤立した中、懸命に地域医療を維持した。

このようなことから、両病院の看護体制の維持のため、多数の看護師を、他の機構病院から応援に派遣した。4月13日以降は、北海道東北ブロックが管内病院からの看護師派遣を調整し、6月30日まで継続的に支援した。

【仙台医療センターへの看護師派遣スケジュール】

派遣病院	3月19日	20日	21日	22日	23日	24日
宇多野病院	看護師2名→					
大阪医療センター	看護師1名→					
近畿中央胸部疾患センター	看護師1名→			看護師1名→		
大阪南医療センター	看護師1名→			看護師1名→		
神戸医療センター	看護師1名→			看護師1名→		
姫路医療センター	看護師1名→			看護師1名→		
京都医療センター				看護師2名→		



近畿ブロック管内病院（宮城病院への看護師支援）

【宮城病院への看護師派遣スケジュール】

派遣病院	3月		4月		5月		6月		7月		
	15日	31日	1日	15日	30日	1日	15日	30日	1日	15日	31日
福井病院	1名→										
あわら病院	1名→	1名→									
東京都病院	1名→										
刀根山病院	2名→	1名→									
兵庫中央病院	1名→	1名→									
奈良医療センター	2名→	2名→									
やまと精神医療センター (旧松原病院)	2名→	2名→									
和歌山病院		2名→									
福岡病院			2名→								
宮崎病院			4名→								
南九州病院			2名→								
柳井病院			1名→	1名→							
浜田医療センター			2名→								
松江医療センター			2名→								
東徳島医療センター			2名→								
徳島病院			2名→								
米子医療センター			2名→								
山口宇部医療センター			2名→								
南岡山医療センター			2名→								
高松医療センター			2名→								
いわき病院			3名→	1名→	1名→	1名→	1名→	1名→	1名→	1名→	1名→
北海道がんセンター						1名→					
北海道医療センター						1名→					
函館病院						1名→					
弘前病院						1名→	1名→	1名→	1名→	1名→	1名→
青森病院											1名→
旭川医療センター							3名→			3名→	
帯広病院							1名→	1名→		1名→	1名→
あきた病院									2名→		
仙台医療センター									1名→		



①～③ 近畿ブロック管内病院
 ④ 中国四国ブロック管内病院
 (宮城病院への看護師派遣)
 ⑤～⑦ 仙台医療センターの様子

(2) 宇都宮病院への看護師等の派遣

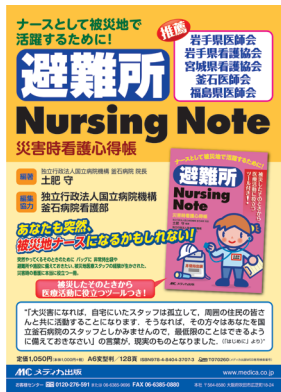
宇都宮病院では、ライフラインが停止すると共に、病棟が水道管の破損による浸水や天井の落下により使用することができなくなったため、近隣の養護学校や被害が無かった病棟に患者を移動するなどの対応に当たった。こ

れらの状況により職員の疲弊が著しいことから関東信越ブロック管内病院から看護師、薬剤師、事務員等を3月15日から3月26日まで派遣し、診療機能の維持を図った。なお、レスピレーター装着患者3名を栃木病院に移送した。

【派遣スケジュール】

派遣病院	3月15日	16日	17日	18日	19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日	26日
栃木病院	看護師6名→ 事務職2名→ 薬剤師2名→											
東京医療センター				看護師2名→ 事務職1名→								
千葉東病院							看護師3名→ 事務職1名→					
新潟病院			看護師4名→									
さいがた病院										看護師4名→		

釜石病院土肥院長が災害時看護心得帳「Nursing Note」を出版しました



大震災を身近で経験しまして、スタッフを含め様々な経験をいたしました。これらの経験や教訓を、他の地域の方や後世にも伝えて、役立てたいと思い、5月頃から7月頃まで不眠不休で「避難所ナースノート」をまとめ、出版いたしました。

この本のコンセプトは、ナース自身が被災をして、避難所に避難した時にどんな心構えで、どう行動すれば良いか、と言う点で編集しております。出来上がりましてからの評判は良く、特に看護スタッフからは絶大な支持を得ております。ぜひ、皆様にも活用して頂ければ幸いです。

なお、この本で得ました印税は、全て被災地の復興のために使う予定でありますので、ご高配の程よろしくお願い申し上げます。

独立行政法人国立病院機構釜石病院 院長 土肥 守

(3) 水戸医療センターへの医師・看護師等派遣

水戸医療センターが、民間病院から入院患者50名、

いわき病院から39名を受け入れるにあたり、医師、看護師、診療放射線技師を3月15日から3月25日の間派遣した。

【派遣スケジュール】

派遣病院	3月15日	16日	17日	18日	19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日
高崎総合医療センター	医師1名→ 看護師3名→			診療放射線技師2名→							
埼玉病院	医師2名→ 看護師4名→ 診療放射線技師1名→			診療放射線技師1名→							
東埼玉病院	医師1名→ 看護師2名→										
下総精神医療センター	看護師3名→										
千葉医療センター	看護師4名→										
村山医療センター	看護師4名→										
東京病院	看護師2名→										
東京医療センター				医師4名→							
まつもと医療センター松本病院					診療放射線技師1名→			診療放射線技師1名→			
富山病院				看護師1名→							
北陸病院				看護師1名→				看護師1名→			
金沢医療センター				看護師1名→				看護師1名→			
医王病院				看護師1名→				看護師1名→			
七尾病院								看護師2名→			
石川病院				看護師1名→							
長良医療センター				看護師1名→				看護師1名→			
静岡てんかん・神経医療センター								看護師1名→			
静岡医療センター				看護師1名→				看護師1名→			
名古屋医療センター				看護師5名→				看護師3名→			
東名古屋病院								看護師1名→			
東尾張病院				看護師3名→				看護師3名→			
三重中央医療センター				看護師2名→				看護師2名→			



① 東京医療センター（水戸医療センターへの医師派遣）
② 東埼玉病院（水戸医療センターへの医師・看護師派遣）

(3) 霞ヶ浦医療センターへの医師派遣

霞ヶ浦医療センターは、いわき病院及び茨城東病院から重心患者46名を受け入れるとともに、茨城市立総合病院等県内の病院から脳出血後、心疾患、認知症やパーキンソンなど20名を超える患者を受け入れた。主に内科

系(内科、消化器科、呼吸器科)の医師3名と筑波大学からの応援医師が対応していたが、負担が大きいことから3月23日から3月30日までの間、関東信越ブロック管内病院から医師を派遣した。

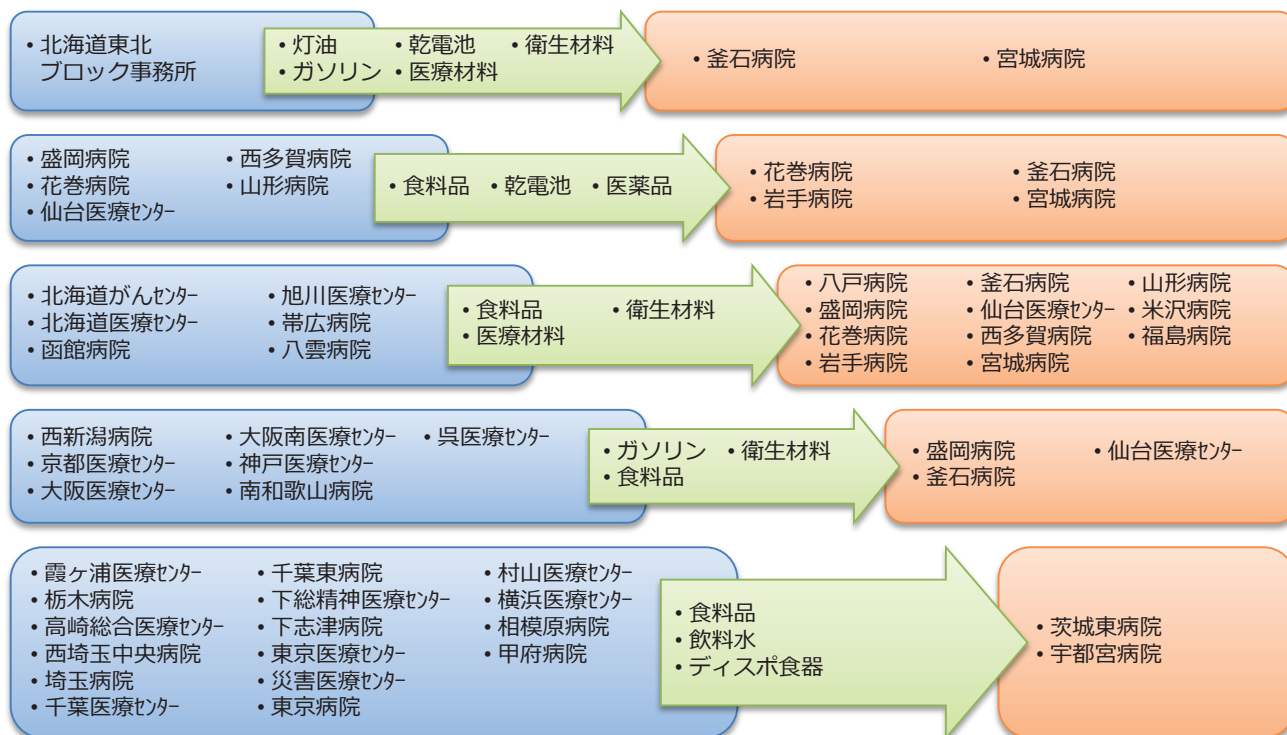
【派遣スケジュール】

派遣病院	3月23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日
千葉東病院	医師1名→							
箱根病院	医師1名→							
西埼玉中央病院					医師1名→			
千葉医療センター					医師1名→			

被災した機構病院に対する食糧等の支援

ライフラインの停止により、入院患者等に提供する飲料水、食糧の確保が困難となった病院に対し、北海道東北、関東信越ブロック管内の病院をはじめ、近畿ブロック

管内病院や呉医療センターから飲料水、食糧等を支援した。



機構本部の活動

機構本部では、地震発生直後、機構本部内に「国立病院機構災害対策本部」を設置し24時間体制で震災の対応をした。

ブロック事務所を通じて各病院の被害状況を把握し、患者食糧、医薬品、ガソリン等を手配、被災病院に緊急物資搬送した。同時に被災県、厚生労働省からの医療班等の派遣要請に対して、ブロック事務所と連携しながら派遣計画を策定し、切れ目のない支援活動を可能にした。

また、被災地での支援活動の拠点として設置したNHO現地災害対策本部へ3月14日から5月17日までの

10トラックによる支援物資搬送

本部が手配した10トラックに、呉医療センターに備蓄されている医療材料、医薬品、食糧を積載し、仙台医療センター及び盛岡病院に搬送した。17日16時に呉医療センターを出発したトラックは神戸医療センター、京都医療センター（大阪南医療センターからの物資も搬入）を経由し支援物資を追加積載。18日に現地に到着した。

間に約130名（延べ約520人日）の本部・ブロック・病院職員を派遣し、避難所での医療ニーズの把握、地元自治体との連絡調整、医療班のサポートなどを行った。



- ① NHO 現地対策本部
- ② 医療班等の移動手段を確保
- ③ 各病院の被害状況把握
- ④ 医療班の食糧等装備品調達
- ⑤ 首相官邸に要請した支援物資の搬入
- ⑥ 北海道東北ブロック事務所での情報収集
- ⑦ 北海道東北ブロック事務所による物資搬送
- ⑧ 北海道の機構病院からの支援物資
- ⑨ 仙台医療センターの様子

ブロック事務所の活動

北海道東北、関東信越ブロック事務所では、地震発生直後から24時間体制で管内病院の被害状況を情報収集、不足物資の把握・搬送を行うとともに、医療班等の派遣に伴い派遣病院、移動手段、使用する医薬品の確保等の調整を行った。

また、北海道東北ブロック事務所では、被害の大きかった仙台医療センター、宮城病院に対して、ブロック職員

を派遣し、患者給食配膳作業や避難住民の避難場所の設置作業等の人的応援をした。

東海北陸、近畿、中国四国、九州ブロック事務所においては、医療班等の派遣調整の他、被災地に設置したNHO現地対策本部に職員を派遣し、機構本部とともに活動した。

